授業方法について独自に工夫していること【創造科学系】
学習管理システムに授業資料をすべて掲載し、課題提出と採点結果の確認、日常的な連絡も同じシステムを用いて利用できるようにしている。クラウド上に構築されたもので、モバイルアプリも提供されているため、学生はPCを利用する授業では、各自のスマートフォン画面で操作内容を確認しながら学習を進めることができる（演習、実習科目の場合）。授業内容では、情報Ｉでは学生たちにワークシートや教材を触って試行錯誤させ、考えを共有しあうアクティブラーニングを志向し、ソフトウェアＩでは統計的な考え方の把握を中心としたExcel操作を演習し、プログラミング実習Ｉではこの授業用に開発した計測制御基板を用いて、基礎的な内容から発展的な様々なアイディアを実現するプログラム作成を行う。
学生とのコミュニケーションを重視している。特に「情報Ｉ」と「ソフトウェアＩ」は1年生の最初の授業であるため、ひとりひとりの学生の特徴把握に努め、少人数であることを活かし、発問に対する指名や、発言に基づく授業展開を意識的に行っている。授業時間外でも学習管理システムに補足的な資料の提示を随時行い解説を行ったり、学生からの連絡に対してできるだけ迅速な対応をしたりするよう心がけている。「プログラミング実習Ｉ」は中学校技術の次期学習指導要領でも強化される分野であるため、全員の共通認識が高まるよう、提出させる課題は「みんなを楽しませる作品」とし、次の授業で公開レビューを行い、その場で相互評価し、教員のコメントを加え、合議により採点を行った。最終課題は夏休みにかかったが、お盆休みも毎日寄せられた質問に公開で考え方を提示する形の回答をし、全員の意識を高めるようにした。
ピアノ1については、個人の中での学習だけでなく、グループとしてお互いのピアノを聴きあったり、意見交換をしたり、悩みについて検討していくことで、これまでの一人で学ぶピアノからの脱却をねらっている。 ピアノ実習については、単にピアノを弾くということではなく、授業の中でのピアノの活かし方や、ピアノを用いながらの授業では、ピアノを弾くということに加えてどのような力が必要なのか、何を考えておかなくてはならないのか、という点について考えられるように工夫している。
主体的な学びを行うような課題を作って、アクティブラーニングになるよう工夫している。
実技を取り入れた授業ということもありますが、学生が主体的に活動できるように授業の始めのイントロダクションに重きを置き、その日のめあてを明確にしたうえで学生が授業を創っていく雰囲気を重視している。
授業の資料は初回開講時にすべてネット上に提示し、いつでも必要な資料をダウンロードできるようにしている。図版入りのノートを配布し、各自が作品同士の有機的な結びつきを探れるよう工夫している。
授業では、過去に報告されている研究レベルで明らかな内容（図表等）を提示することによって、学生の理解を深めるよう努めた。
ゲーム時間と振り返りの時間を確保するために、それ以外の活動をルーチン化して授業効率を上げています。授業ノート(保存版)を作成し、教員になったときもそのまま教材資料として活用できるようにしています。
グループワークによる学習を軸にして授業を組み立て、教え合い活動を促すようにした。
①　授業内容の構成が、教師としての授業づくりそのものになるように、球技の単元構成や1単位時間の流れを加味して運動教材を配列した。 ②　前半は指導内容を具体化する教材づくりの紹介と実技、後半は前半の内容をふまえ，ねらいに即した教材づくりを課題とし，全体で共有化した。 ③　実技では扱えない内容は紙面資料として配付した。 ④　学習形態を全体・チーム・ペアの3段階に分け，効果性と効率性を図った。そのまま学生が教育実習ならびに現職教員になったときの授業づくりの留意点とした。
スポーツ医学：パワーポイントを使用し，できる限り多くの資料（図，絵）と動画を用いて説明を行っている.

これらの授業は、小中学校の音楽教員として学校内音楽活動（合唱コンクールや学習発表会、音楽系部活動等）を担うために必要な知識と技術を身に付けるものであるが、広く一般の音楽教育（お稽ごとや一般音楽団体等）に関わる事柄にも興味関心を抱かせるように工夫したつもりである。 概ね、受講者には受け入れてもらえたと判断しているが、「難易度が難しすぎる」と回答した者が若干名いたことから、「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。しかし安易な方向へ合わせていくことに疑問を感じている。
ピアノ演奏を通じて、音楽の中に内在する、人間の心や考え方を知り、精神の向上や癒し、計画性などを音楽の中から読み取り、それを楽譜に書いてくる自宅学習をして、それを携帯で映像に加工して、授業のたびに、それを発表させながら演奏にのぞんでもらっている。元来、音として消えてしまう音楽に学生同士が内在する音楽の共有して、勉強意欲を高める工夫をしている。また生徒ひとりの完成を大事に保ちながら具体的奏法を伝授している。
昨年度までは，3年生で開講していた授業で，本年度から1年生で開講することになった。よって，受講者は電気的基礎知識がないと考えられる。特に電磁気学的な基礎知識がないと考えられる。そこで，シラバスで述べている項目より量的に減らし，平易に話すように心がけた。特に受講者とのキャッチボールを多くし電気材料して基礎的な知識習得の定着を図った。また，時間をロスする小テストを辞め，課題レーポートを多くした。なるべく授業を楽しくするため，最近の電気材料関係のトッピクスを織り交ぜて授業を実施した。
実習であることより，基礎的な理論は受講者が既に一定レベルに達していることを念頭に，シラバス通りに授業進行を進め，受講者が前もって調べ学習をできるように前時にやるべき内容を伝えておき，電気パーツ等を自分の責任のもとで購入し，手に入れるようにしている。課題解決に向け学生同士が議論し合って解決できるように授業者が極力介入することを控えた。よって，実習中にPC，タブレット，スマホ等による検索なども許可した。最後に，まとめ的な課題として，自由作品を企画・設計・製作させた。
実技の授業において、自分の遂行している動きと自分の感覚のズレを実感させるために、運動遂行直後に自分の動きを最初から見ることができるように、遅延映像装置を用いたビデオフィードバックを学習者に提供している。
1. 下見の実施 2. 野外環境の創設 3. 学生との対話形式による実施内容の企画立案
描き方をきちんと教えてもらえれば自分でも描けるということを体験させるように努めている。自分で描けないような絵を学校現場で子どもたちに教えられる筈はないので、道具の置き方や物の見方、描き方を教えている。小学校図画工作科における題材数は、決して少なくないので、時間をかけて少しのテーマを扱うのではなく、15回の授業の中で10のテーマについて描き方と教え方が学べるように授業を行っている。出欠は毎回の作品提出でチェックしている。また、学生たちは自身の絵の具を持参させると、小学校の児童たちと同様にパレットに僅かな絵の具しか出さず、それが絵を描くうえで失敗の原因につながりやすいため、授業者が絵の具と画用紙を持参して、好きなだけ使えるように配慮している。（絵画基礎） 風景画を描く際の場所選び、構図の作り方、着彩方法に重点を置いて実地指導を行った。（風景写生）
授業が知識の一方的な伝達にならないよう、学生の反応を見ながら、適時、質問や議論の時間を取りながら進めている。
二次元から三次元に移行する過程で自らの矛盾に気づいたり、頭の中になかった造形に気づくような課題を出している。 例を示し、そこから何かを発見することで、自分の中になかったものを導き出せるように工夫している。
デザインに対する誤解を解き、表面的なデザインの思考ではなく、もっと広義で核に迫るような課題を出している。 新しい発想の仕方や「気づき」を求めること自体がデザインにとって大切であることを理解してもらうような工夫をしている。
出来るだけ具体的な事例を参考に上げながら説明をするよう努めている。

住宅設計がテーマの授業であるため、受講生ができるだけ実際に近い設計プロセスを体験できるように、演習課題を多く設けた。
工芸領域の授業の中で、それまで扱ってこなかった素材や制作工程を扱う授業にするとともに、受講生自らが制作時に試行錯誤できる内容をと考えて授業を行っています。
本授業は、木工を学ぶ授業です。15回の授業の中で、木工の作品制作だけでなく、その制作に必要な道具や加工機械の基本的な使い方、安全面での指導、制作環境を整えることの指導等を扱っています。また大学生自らが制作することに限らず、子どもたちが木工を体験する際に必要な道具や加工機械の基本的な使い方、安全面での指導等も扱っています。また教材開発にも繋がる内容を扱うように心掛けています。
「美術史演習Ⅲ」は4年生対象のゼミであり、毎回一人の学生が各自で設定したテーマについて発表し、発表後に他の学生と質疑応答を行う。また、授業後に発表内容についてのレポートを毎回課している。学生の発表について、事前や発表後に適宜指導している。 「美術史現地指導Ⅲ」と「美術史現地指導Ⅳ」はそれぞれ3年生と4年生を対象に、夏期休業中に集中講義で京都・奈良や東京の社寺や博物館・美術館に赴き、美術工芸作品を現地で見学している。見学する作品について事前レポートを課し、見学対象についての関心を高め、理解が深まるようにしている。
担当科目はいずれも日本美術史の講義であり、独自に作成した授業資料を用意して学生に配布し、画像資料を作成して画像を示しながら説明を加えている。また、「芸術概論A」については毎時間、「日本美術史概論Ⅰ」と「日本美術史研究Ⅰ」については前期期間中に数度授業時間内に作成するレポートを課し、学生の理解度を測ると共に積極的な授業への参加を促した。
学生の理解度に応じてグループ分けをし授業を進めた。
指導した内容の理解度に応じてグループ分けをして指導。
学生の自主性に任せ、合唱曲を歌にあたって音とりからある程度の完成域まではやらせて、歌うことだけでなく、指導する方法も学ばせるようにしている。
この授業は家庭科免許用の教科であるため、必要最低限の知識の伝達をすることが必要であり、パソコンのパワーポイントで詳細な図示表示するのみならず、毎回の授業内容を簡潔にまとめたプリントを配付しながら授業を行った。 単なる講義では、なかなか知識として身に付かないので、前半には電気の基礎について講義し、その講義内容の確認テストを行い、電気の基礎理論あるいは基礎常識的な知識を確認し、後半では日常の中で使用されている電化製品を取りあげ、その動作原理や機構についての説明を行った。そして、後半には、自己調査をさせるため、課題レポートとして電化製品の機構や内部構造を調査させた。以上、基礎常識の確認と自己調査による製品の機構の確認をさせたことが授業法としての工夫である。
グループワークを多く取り入れ、学生自身が考え、学生同士が相談し合って、進めていく形を取っている。 学生の関心が高いものや新しい発見ができる題材を用意している。 筆記試験後、間違った問題を再度解き直し、提出してもらい、教員が採点するなど、復習の場を多く設けた。
油彩画初心者が多いことを考慮し、道具の使い方・絵の具の特性・西洋絵画の歴史等を紹介することにより制作に対する興味、理解が深まるように心掛けた。またカリキュラムの進行に合わせ、制作過程を毎時間ごとに写真記録しファイリングすることにより後の制作の一助とした。
映像資料を多く使い、文字情報だけでなく視覚・聴覚的にも感じ、理解を深めることのできる授業を心がけています。 また、授業内容において重要な資料だけでなく、教員・音楽家として知っておくべき事柄については幅広く紹介するように努めています。

個人レッスンの形で進めていくのですが、それにしては生徒数が多い授業なので、 レッスンを受けていない生徒も興味を持ち続けられて、聞くことによって、また指導する立場にたったらということも、生徒に投げかけながら進めていくようにしている。
・専用の道具が必要となる内容を扱うが、社会活動や教育活動で活かすためには使用する道具を自分で準備できる力が必要と考え、各自で簡単な道具を製作し、それを用いて基本技法が学べるような教材づくりをしている。その際、安価で手に入れやすい材料を用い身近な文具や工具のみで作ることができること、また40名ちかい受講生が待ち時間なく同時に製作できることを満たすことができるような教材になるよう工夫している。 ・資料などのプリント類に加え、作った道具や作品も同じA4ファイルにまとめて保存できるような工夫を行っている。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。【創造科学系】
「情報Ⅰ」については、1年生であるため、毎時間ノートの写真を学習管理システム上に提出させ、これを平常点とした。これと、最終試験（試験用紙使用、持ち込み不可）により評価した。「ソフトウェアⅠ」では、まず数理的・統計的な考え方について資料に基づき議論した結果をレポート提出させ、これにコメントを与えたほか、Excelの演習結果はファイルを学習管理システムに提出させ、これらを平常点とした。これと最終課題により評価を行った。「プログラミング実習Ⅰ」では、毎時新しい概念が出るよう授業構成し、それに対応した例題を改良させる課題を求めた。これを平常点とし、最終課題及び発表会の内容を併せて評価を行った。
ペーパーテスト以外ではすべて学習管理システムの「課題」機能を用いて提出させ、そこに採点するため、履修者はすべての素点を随時確認できる状態である。システムには「達成度」の数値も表示されるため、どの程度遅れているかが自己判断できる。各自の評価の細部が本人に公開されているため、最終評価に対する疑義等のクレームはない。
実技の授業でもあるので、実際のピアノ演奏、グループ討議での様子、レポートなどを総合的に判断して成績を出している。
授業に対する、熱意、関心、態度を重点にして成績をつけた。
出席、授業態度、試験、レポートで評価を行いました。基準は教員免許状を取得するのにふさわしいかというところに単位を与える基準を置いた。具体的には、授業に対して向き合っているかどうかを判断することに重きを置き、出席回数、遅刻、服装などの評価と、授業中の発言、行動を注視することや、レポートの内容によって見極めた。
レポートでは、内容だけでなくレポートの美的な仕上がりにも留意するよう指導し、それに基づき採点している。試験では、授業内容の理解度を量るマークシート式の設問を課し、学内基準に基づいて評価している。
3～4回の授業ごとに、行った授業内容の理解度を確認するための小テストを行い、その合計点で成績評価に用いた。
実技科目のなので，活動状況を観察し内容の理解度を評価するとともに、授業ノートが毎時間の振り返りレポートになっているので，思考力・判断力、知識・理解を見るために利用しています。
①基礎技能スキルテスト，②各種ゲームの評価，③観察による基本技術の分析レポート，④学習意欲・態度，⑤ルールなど知識の理解度，⑥出席状況などで総合的に評価した。なお，本授業は2名の教員で7回ずつに分けて少人数での指導となるようにした。そのため，2名の教員で①から⑥の観点で，成績評価を提出した。
スポーツ医学：出席と授業態度（悪いものはいないので加味せず），最終テストの成績より 水泳：出席と最終試験（大遠泳の結果，全員完泳したため加味せず）
教員として勤務する場合、あるいは音楽家として演奏活動に従事する場合、いずれも遅刻と欠席は許されないことから、「出席点」を特に重視して成績評価をつけるようにしている。さらに、「知っている／知らなかった」等の大学入学以前に身に付けた知識の多寡や「できる／できない」等の技能ではなく、授業を通じて身に付けた知識や技能の「伸びしろ」を重視して成績評価をつけるようしている。そのため、欠席ゼロで課題をクリアした学生には授業態度に問題の無い限りA評価を出すようにしている。結果として、A評価が大半を占め、受講者の割合によって評価を調整する相対評価ではなく、絶対評価で成績評価を判定することになる。実技を含む技能系教科では、相対的な評価は意味をなさないと考える。
毎回の授業での学習結果の発表とレポート提出と出席状況により評価を行なった。
期末テスト（40%），　課題レポート（40%）並びに授業態度（20%）を総合評価する。レポートはまなびネットにより提出させていた。期末テストは課題レポートの内容を多く出題し，本当に定着しているかをしっかりと評価した。

作品提出【25%】、レポート【25%】、授業態度【25%】、プレゼンテーション【25%】 を総合して成績評価した。最も重要なことは，最後の自由作品の提出とそれに関わるプレゼンテーションを見れば，受講者がしっかりとした電気的技術の習得をし，しっかりとした設計・製作ができるかが分かる。受講者が教員となった時，生徒にしっかりとした実習の授業ができるかどうかが分かる。
出席数、レポートの内容、授業態度、運動遂行結果を総合的に判断して。
不慣れな環境での野外宿泊生活の為，生活・活動全般への学習意欲と活動内容を評価対象とした。 実技活動すべてに困難な課題が多く，集中期間中の目に見える上達は期待できないため，成果は事後のレポートと合わせて評価とした。
出席回数、つまり提出作品数、及び作品自体のクオリティで成績を判定するのであるが、通常のレベルで8点、それよりも良いと9点、授業者と同等またはそれ以上だと10点、また通常より低いレベルは7点、授業をきちんと聞いていない（指示通りに描けていない）ときは6点を与えて、最終的に100点満点にしている。（絵画基礎） 作品評価で学業成績の結果を出した。総合的には良くはないが合格のレベルを60～69，普通レベルを70～79、良い80～89，大変良い90～を大雑把な目安とした。さらに各レベルの中における細かな5つの観点（主題の明確さ、構図、色彩の調和、筆触、明暗での画面の組み立て）で見て、良いか、良くはないかで加減している。（風景写生）
授業の出席回数、取組み態度、試験を総合的に評価して成績をきめている。
出席率、課題に対する取り組み方、提出物を総合的に判断。
基本的内容を把握できているかどうか、それを文章で自分なりに表現できているかどうかを判断した。
演習課題により学業成績を出した。基準としては、授業内容の理解度として、図面の正確な表現、住まい手のニーズを踏まえた間取り計画の視点から成績判定を行った。受講生の成績はおおむね良好で、授業内容を理解してくれたと考える。
授業の中では、作品だけでなく、作品制作時の流れをまとめたレポートを提出して頂くようにしています。その中に書かれた、作品制作を行う工程の中で、どれだけ作品について形や動きを検討したか、また制作時に工夫をしたか等を成績評価に加味しています。また普段の授業時での作品制作に取り組む姿勢も成績評価の判断に取り入れています。
「美術史演習Ⅲ」については、発表内容に関して先行研究の踏まえ方、考察の合理性などの水準とパワーポイントを用いた発表方法、及び事後レポートを含めた授業への参加姿勢を評価の対象とし、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。 「美術史現地指導Ⅲ」と「美術史現地指導Ⅳ」については、事前レポートの内容と現地で見学した作品のスケッチ、見学先での態度を評価の対象とし、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。
「芸術概論A」は毎時間、講義の後で授業時間内に作成するレポートを課し、授業内容のまとめと質問を書くように求めた。そのレポートで出席を確認すると共に授業内容の理解度を測り、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。 「日本美術史概論Ⅰ」と「日本美術史研究Ⅰ」については、授業時間内に作成するレポートの他に学期末にまとまった枚数のレポートを課し、授業内容の理解度や参加の姿勢を対象に、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。
出席，受講態度，服装，指導した内容の理解度・上達度、レポートで総合的に評価した。
出席、態度、スキルテスト。

期末の実技試験と授業態度等
出欠と授業への参加姿勢
電気に関する基礎常識の確認テストの結果と提出させた課題レポートの調査内容を主とし、各授業への出席状況も加味して学業成績を評価した。
実習の場合は出欠を重視し、授業への意欲や積極性、リーダーシップなども加え総合的に評価した。 座学は、小テスト、本試験、レポート、出欠など総合的に評価した。
テーマの設定・素材への理解・制作上の工夫・表現力(デッサン)・独創性等を総合的に判断し、提出作品(F10号)並びに制作記録ファイルにより評価採点。
期末に実施した筆記試験70%、授業内課題30%。 個別の事象について理解しているかだけでなく、それらをどのように関連づけて解釈しようとしているかも評価のポイントとしています。
試験の点数を80%、あとは、授業の出席、授業態度を加味して採点。
フェルト技法2種、染色2種＋防染技法2種、織り、編み、組みのそれぞれの技法について小作品の提出を求め、その作品を基に評価を行った。それぞれの基本技法の習得が認められることを単位認定の基準とした。 作品ごとに3段階の評価を行うとともに、独自の工夫や作品の完成度の高さ、授業外にも制作に取り組むなどの意欲の高さなどに対しては加点し、すべての作品の合計点を素点とし、評価とした。

アンケート結果を受けて改善したいところ　【創造科学系】
学習習慣に配慮する授業運営を行ったことで、まだ1年生で意欲が不十分ではあるがおおむね1時間の時間外学習時間を確保できたと考えているが、自ら調べて考えを深める段階に持ち込むための工夫に改善の余地があると考えた。ただ、無理に学生に負荷をかけるのは、特に前期に専門科目が集中しているため、前期の授業では避けたいところである。3年生については、9月中旬に自己都合により退学した学生1名が否定的回答をしていると想像する。その理由は、他の高い肯定的評価に集中した回答との差が明瞭なためである。「話し方の聞き取りやすさ」が全体に低いことについては、板書計画や提示資料の改善で授業内の学習のポイントを明瞭にすることにより、発問や指示の具体性を高めることによって改善したい。
ピアノ実習については、今年度大幅に内容を変更して取り組んだ授業なので、学生の様子を見ながら、授業期間中も変更を加えながら授業を行っていた。グループを活かしながら進めて行くことを、次年度はもっと考えていきたい。
教員に対して気軽に話ができるような雰囲気づくりを心掛け、コミュニケーションを取りやすくする。
概ね良好であると考えられるので、継続して行っていくことでデータが蓄積されより良い評価基準が作ることができると考える。
授業内で学生自身に考えさせたり、自由に討論する時間を設けたいと考えている。
教員養成として適切な内容にすべく改善したいと思います。
学習内容についてのコミュニケーションをさらに図る必要がある。
本授業の学習目標の達成率は90.3%（①強くそう思う，②ややそう思う の合計）であった。残りの9.7%（③どちらともいえないと無回答の合計）の数値を少しでも下げるには，「授業の難易度」（③ちょうどよいとする回答が90.3%である一方で，②易しい③難しすぎる の合計が6.4%であった）を再考していきたい。 具体的には，「ゲームから学ぶ」というコンセプトで，「適切な課題設定となるゲームの提示」，「子どもたちの実態に即したゲームの修正・変更」，「ゲームでの問題の外在化」の3つの視点から，運動教材そのものを学生たちがつくりかえていけるプログラムを実施していきたい。また，自由記述の中で「サッカーが好きになった。指導法を利用し，自分のような思いをする子を増やしたい」があった。運動教材の可能性にも言及し，学校で体育を学ぶ意味を今後も探っていきたい。
スポーツ医学：今後もよりわかりやすくなるように資料をバージョンアップしていきたいと考えている. 水泳：安全に配慮し，伝統ある遠泳を継続できるよう努める．体制を整える.
前述したとおり、授業内容の「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。 しかし教員免許に関わる授業において、学生からのアンケート結果を受けて安易で平易な方向へ合わせていくことには強く疑問を感じている。
大半の学生が満足しているので、現状のまま行ないたい。
問1～問7に関して概ね肯定的であることは学生たちは一応自分の授業態度等には満足していると考えることができる。問13の授業の難易度では難しい，難しすぎるが80%もあった。1年生で選択の専門はやはり基礎的な知識がないため，授業者が平易に述べても難しいのかもしれない。やはり開講学年を元に戻すか，かなり平易に分かり易い授業にする必要があると感じた。

誰でもそうなりがちであるが，自分の評価に甘く，他人には厳しいということである。問1～問7は学生自身の達成度の設問で，学生は肯定的な回答である。ある意味，学生たちがのびのび実習できるようにした甲斐があったように思われる。問13で授業の難易度に関して，ちょうどいいと難しいが半々であることに少し改善の余地があるやに思われるが，課題解決に向け学生同士が議論し合って解決できるようにしているため介入は避けた方がいいように思われる。
もう少しは資料を多く配布した方が良いと思いました。
事前(授業外)学習の時間を増やすよう，指導していきたい。
問1から12のうち、問2、問3を除いて①＋②が80％～90％超であったので今後も特に改善に努める必要ななさそうである。問2「授業で提示された課題・参考文献・資料などを自ら検索・参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」や、問3「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらにその思考に基づき行動した。」は、②意外にも③や④と答えた学生も相当数いたことから、今後、自発的な学習につながっていくような授業をしなくてはならないと思う。（絵画基礎） 問2で②、問10で③が最も多かったので、今後は自発的な学習を深めさせることと、教材・教具について工夫する必要がありそうであるが、現地での授業機会しかないため、夜の講評会を学習会活動に改めたい。（風景写生）
授業を受けた後で自ら課題を見つけ行動したり、学生同士で授業内容を深め合った、授業のための週当たりの学習時間が少なかったり、低かった。これらについて、今後改善策を考えなければならないと思った。
授業が難しいという学生が半数以上を占めていたので、難しいと思ってしまうことをそう感じさせない説明方法や導き方を工夫していきたい。
概ね目標を達成できたように思う。
両者ともに、コミュニケーションが取れていない、また授業の難易度が高く、量が多いという結果が比較的に多くなっているため、よりわかりやすく、時間内の量を勘案して改善したいと思う。
アンケート結果は、どの質問に関しても、良好な結果であったことから、大きな改善は必要ないと考える。ただし、「授業の難易度」に関しては、「難しい」との回答が比較的多く、集中講義という授業形式の特徴も影響していると考えられるが、そのような時間的な制約のなかでも、受講生の課題遂行の進捗状況を定期的に把握しながら、授業を進める必要があると思われる。
授業アンケートの結果を見ると、おおむね良い結果であったのではないかと思います。しかしその中でも問3に関連した点では、授業改善していくことができるのではないかと思っています。特に、授業を受けた上で、学生たちが自ら文献やインターネットなどを使って学びを深めていくことができれば良いと思いますので、今後の課題としたいと思っています。
初歩的な内容から専門基礎的な内容までを講義形式で教授していることもあり、学生の反応を見て主体的な授業参加に導く点にやや難がある。学生からの質問事項をくみ上げることも含めて、より積極的な授業参加を促すよう努めたい。
自ら予習・復習をする姿勢を深めさせたい。
問13，14で「難しい」，「多い」という回答があった為、少ない人数ではあったが、今後、更に各々のレベルを考え課題を出す必要があると思った。
課題の曲は、各学生のレベルに合わせて出しているが、入試段階で声楽（主）で入学してきた学生と声楽（副）で入ってきた学生の差は予想以上に大きく、今後、この点を考える必要性を感じた。

一割弱の学生がこの授業に対してマイナスの感想を持っているようであるので、その点を踏まえて、今後改善したいと考える。
授業内容の性格上、どうしても単なる知識の伝達が主となってしまっているようなので、その辺の授業方法をもう少し工夫することが必要であろう。知識そのもの教えると同時に、その知識がどのように各生活用品に利用されているかの応用編の具体例をより広範囲に伝えることが必要であろうと思う。
教材、配布資料の内容を充実させる。
実技制作が中心の授業において30数名の学生を個別に指導するには時間が不足した為、全体講評の機会を増やすことで、より効率の良い指導方法を取り入れたい。
教材・教具のわかりやすさについて、改善していきたいと考えています。 板書に工夫の余地があると感じています。また、より適切な配布資料を用意できるよう努力したいと考えています。
個々で技術の差があるので、そこをくみ取りながら、できるだけすべての生徒が理解でき有意義な授業になるように工夫していきたい。
課題が多く、それに伴って材料や道具なども多いため、忙しく煩雑なところがあると考えていたが、授業内容の量や難易度などの評価は考えていたより悪くなく、むしろさらに学びたいと思う学生が多かったことから、学生の意欲、関心が高く、積極的に学ぼうとする姿勢がうかがえる。教材（プリント、材料など）が多く、配付に時間がかかる、説明が長く理解不足になるなどの欠点があるので、マイクやプロジェクターの活用などを活用し、わかりやすい授業構成を考えていきたい。